

後期西田哲学の実践論

大田健次郎

【概要】

世界中に「マインドフルネス」という禅に似た実践を応用した瞑想的な心理療法が世界中にブームになっているという。そうであれば、禅や西田哲学のある日本の我々はどのような実践をすればいいのか。西田が晩年になって考えた最終的立場による実践とはいかなるものであったのか解明したい。西田哲学の最終的立場は、先行研究からみれば、創造的自己による創造的直観である。その立場から実践論を考察した。

後期西田哲学の実践論は、従来の禅と同じではない。その実践は、まさに社会的生産行動がそのまま同時に創造的自己に至る自己形成であるような実践である。絶対無の体験に基づく創造的自己の自覚の前も後も、社会生産行動の現場で、己を尽くす至誠の実践である。自己は絶対的一者の自己射影点として、社会生活の現場で対象論理的主観的独断を捨てて見て、考え、行動していくことである。

【キーワード】 後期西田哲学、実践論、創造的自己、創造的直観、主観的独断を捨てる

はじめに

最近、禅に似た実践に社会の関心が向けられてきた。マインドフルネス⁽¹⁾という実践が全世界にブームになっているという。それが禅の実践を応用したものだという。ブームになっているマインドフルネスは、筆者のものを含めて、まだ対象論理的な領域の応用である。禅の実践も対象論理ではないという西田哲学では実践をどうとらえていたのか究明したい。

西田は、行為論の前に実在論が必要であるという。

「行為は何処までも個人的自己の行為でなければならない。当為というも、行為的直観的に個人的自己というものが成立してからのことでなければならない」【一〇巻七二頁】。

「認識論の前に実在論がなければならない」【一〇巻五五一頁】という。

西田の実在論も変遷しているので、最終的な実在論の立場からの実践論を究明したい。

この論文では、後期西田哲学の実践を解明したいのであるが、実践するのは「自己」である。意識的自己は真の自己ではなく、意識的自己の実践ではなくて、真の自己を知り、その立場への実践、その立場からの実践を明らかにする必要がある。

その時、真の立場にたちきるのは、宗教的体験が必須であるというふう
に西田は考えていたように思われる。「かかる立場を宗教的立場という」【一〇巻一六三頁】。

西田は『哲学論文集第五』（昭和十九年八月）の「序」には「私は第三論文集において、私の根本的思想を把握し得た。第四論文集においては、そこから主として実践哲学の問題を論じて見た」【一〇巻三四一頁】という。

すなわち、『哲学論文集第四』に、西田は、実践哲学を論じたのである。その「序」では「この書は前論文集において到達した私の根本的思想を基として、主として実践哲学の問題を論じたものである。「絶対矛盾的自己同一」において、私は一応私の根本的思想を明らかにした。この思想を明らかにする為にも、この思想との連関において、種々なる特殊の問題が論ぜられなければならない」【一〇巻三頁】といった。

その『哲学論文集第四』に『実践哲学序論』（以下「実践序論」という）と『ポイエシスとプラクシス（実践哲学序論補説）』（以下「序論補説」という）があり、実践の問題を論じている。そこで、主としてこの2つの論文で、後期西田哲学の実践論を解明したい。

西田は、実在論の究明に尽くしてきたが、ほぼそれを達成したので、その立場による行為論、実践論を「実践序論」と「序論補説」で書いたとみなすことができるだろう。